



TITLE:

# 悪性リンパ腫症例に発生したフルニエ壊疽の1例

AUTHOR(S):

湯村, 寧; 千葉, 喜美男; 斎藤, 一隆; 広川, 信

---

CITATION:

湯村, 寧 ...[et al]. 悪性リンパ腫症例に発生したフルニエ壊疽の1例. 泌尿器科紀要 2000, 46(10): 735-737

ISSUE DATE:

2000-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/114380>

RIGHT:

## 悪性リンパ腫症例に発生したフルニエ壊疽の1例

藤沢市民病院泌尿器科 (部長 : 広川 信)

湯村 寧, 千葉喜美男, 斎藤 一隆, 広川 信

FOURNIER'S GANGRENE IN A PATIENT WITH  
MALIGNANT LYMPHOMA: A CASE REPORT

Yasushi YUMURA, Kimio CHIBA, Kazutaka SAITO and Makoto HIROKAWA

From the Department of Urology, Fujisawa City Hospital

We report a case of Fournier's gangrene. An 83-year-old man underwent biopsy of left inguinal tumor as an outpatient. Pathological diagnosis was malignant lymphoma (diffuse large cell type). Three weeks later, he developed reddened scrotal swelling accompanied with high fever ( $>39^{\circ}\text{C}$ ). On admission, antibiotic chemotherapy was initiated. Although his general condition was improved, scrotal necrosis had developed. A computed tomography scan demonstrated thickened subcutaneous tissue over the left lumbar region. Excision of necrotic tissue and sequential irrigation using povidone iodine liquid were effective. The patient then underwent chemotherapy for malignant lymphoma at the internal department. Nine months after the operation, the scrotal skin had completely recovered.

(Acta Urol. Jpn. 46 : 735-737, 2000)

**Key words:** Fournier's gangrene, Malignant lymphoma

## 緒 言

フルニエ壊疽は抗生剤の発達した今日でも死に至る疾患で, 早期の的確な治療が予後を左右する. 今回, 鼠径部の腫瘍の生検で悪性リンパ腫が診断されたが, 生検を機に本症の発症をみたので考察を行った.

## 症 例

患者 : 83歳, 男性

主訴 : 高熱と陰嚢の痛性腫脹

家族歴・既往歴 : 特記すべきことなし

現病歴 : 1995年11月下旬, 両側の鼠径部に腫脹がみられ外科で左鼠径部の腫瘍生検を施行した. 病理診断は malignant lymphoma (diffused large cell type) であった. その後, 生検部よりリンパ液の流出が続き生検後約3週間で39度台の高熱が出現したため12月26日外科に入院となった.

身体所見 : 両側腋窩, 両側鼠径部に痛性にリンパ節の腫脹あり, 陰嚢は手拳大に腫脹し皮膚は浮腫状で発赤を伴っていた.

検査所見 : 白血球数  $48,700/\text{mm}^3$  と高値, CRP も  $37.5\text{ mg/dl}$  と上昇していた. 軽度の貧血 (Hb  $12.1\text{ g/dl}$ ) が認められ, 総蛋白  $5.7\text{ g/dl}$ , アルブミン  $2.9\text{ g/dl}$  であった. 血中電解質は Na  $136\text{ mEq/l}$ , K  $4.9\text{ mEq/l}$ , Cl  $101\text{ mEq/l}$  と正常であった. 尿所見で尿路感染が認められたが細菌培養は外科で検査されていないため不明であった.

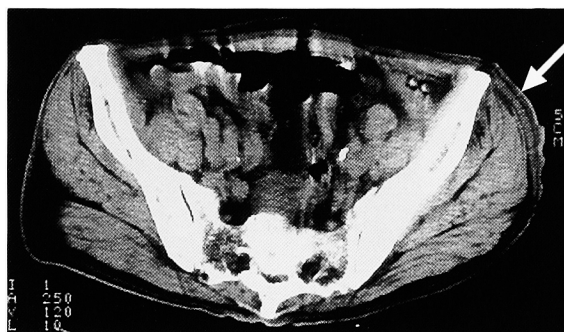


Fig. 1. Computed tomography (CT) scan demonstrated thickened subcutaneous tissue including fascia over the left lumbar region that was helpful to demarcate the spread of inflammation (arrow).

画像検査所見 : 骨盤部 CT では左鼠径部の脂肪内に網状の陰影を, また陰嚢部, 左腰部の皮膚, 皮下組織の肥厚が認められ, 筋膜炎の存在が疑われた (Fig. 1).

入院後経過 : 経過を Fig. 2 に示す 外科にて抗菌剤 IPM/CS を投与を開始したところ直ちに解熱したが入院後10日目より陰嚢皮膚の壊死が見られた. さらに15日後には陰嚢の皮膚は島状に脱落し黄白色の苔状の壊死状物質と膿汁が皮下に認められ (Fig. 3A) 当科に転科となった. 直ちに壊死組織の除去を行い創を開放, ポビドンヨードによる洗浄を1日2回行った. 経過は良好で創部は肉芽が隆起を続けているため植

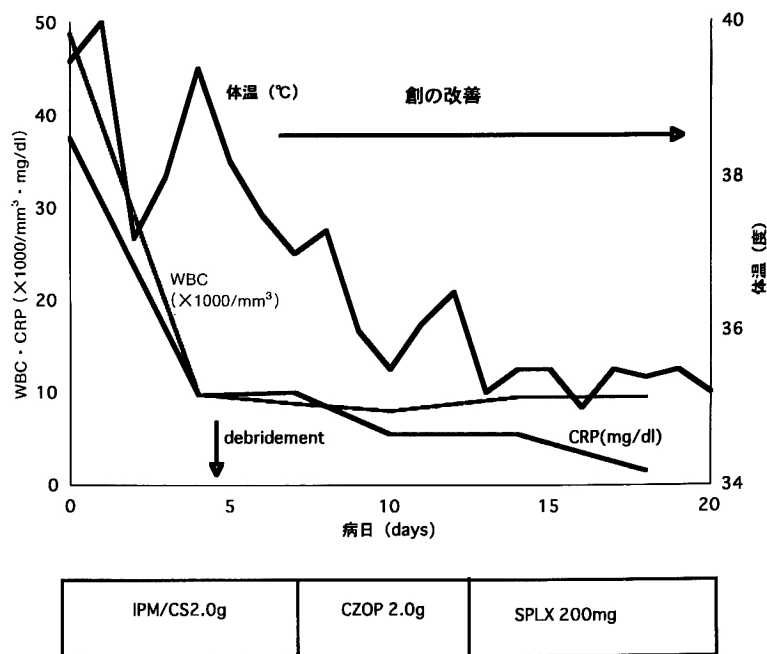


Fig. 2. Clinical course.

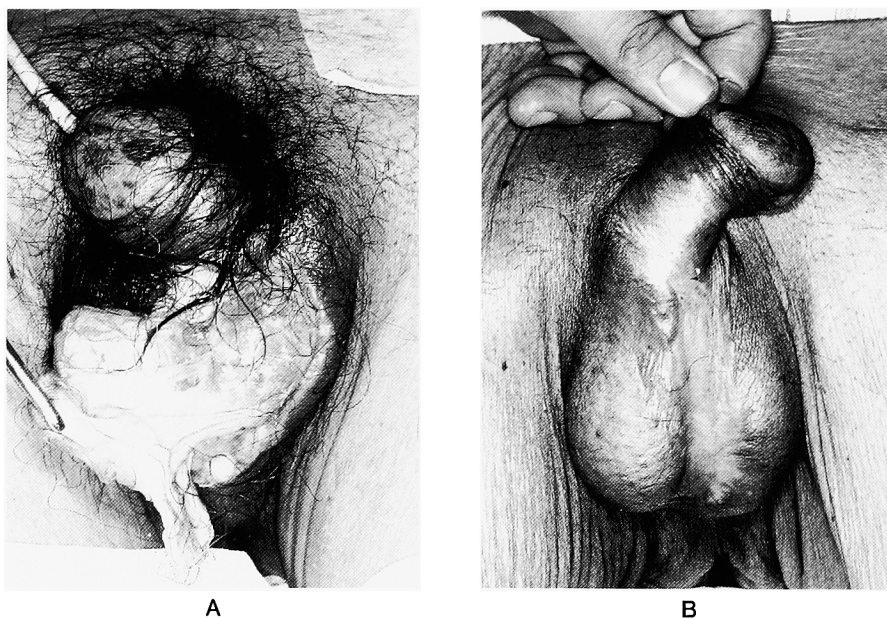


Fig. 3. A: A photograph of a patient with scrotal gangrene before incision.  
 B: Nine months after the operation, the scrotal skin was healed completely.

皮，縫縮などを行わず1996年2月14日，壊死部除去後28日目に lymphoma の治療のために内科へ転科となった。内科転科直前に撮影した CT では入院時にはみられた左腰部の皮膚，皮下組織の肥厚，左鼠径部の網状陰影は消失しており抗生剤投与により改善したと考えられた。その後の創部の経過は良好で同年5月には完治していた。Fig. 3B は同年8月末の陰嚢が完全に皮膚に覆われている。

### 考 察

Fournier の壊疽の本態は男子性器，陰部の重篤な

壊死性の筋膜炎の一形態であり，皮下組織の炎症による血行の途絶が皮膚の不可逆性の壊疽をもたらすと考えられている<sup>1)</sup> 起因菌は嫌気性菌と好気性菌の協調感染によると考えられている<sup>2)</sup>が他に真菌などが認められることもある。感染経路としては1) 外陰部周囲の外傷から皮下組織への細菌の侵入，2) 尿道周囲腺からの感染，3) 肛門周囲部からの進展，の3経路が考えられる<sup>2)</sup> 本症例はリンパ節生検部からの感染という経路をとり細菌が侵入，悪性リンパ腫という免疫能低下状態で壊疽を生じたと思われる。

壊死範囲の正確な把握が治療の上で求められている

Table 1. Overview of cases of Fournier's gangrene in Japanese literature during the last 10 years (1988-1998)

		生存群 (n=74)	死亡群 (n=10)
平均年齢		58.8 (10-88)	67.8 (56-88)
基礎疾患	糖尿病	40 (54%)	3 (30%)
	アルコール中毒	5 (6.7)	0 (0)
	悪性腫瘍	8 (10.8)	6 (60)
	ステロイド剤の乱用	3 (4.1)	1 (10)
	肝硬変	3 (4.1)	0 (0)
	脳血管障害	3 (4.1)	0 (0)
誘因	カテーテル留置	6	2
	尿路系の外傷・感染	11	2
	泌尿器科的処置 (尿道ブジー, 前立腺マッサージなど)	5	0
	会陰部の外傷・感染	8	0
	痔核	3	0
	肛門周囲膿瘍	5	0
	腸穿孔による膿瘍	2	2
壊死範囲	陰囊のみ	23	3
	会陰部 鼠径部・臀部への進展	26	2
	腹部・大腿部への進展	21	4

が, 病変の把握に CT の利用が有用で, 筋膜炎部は網状陰影, 皮下組織の肥厚として描写される. 自験例でも同様の所見が認められたが治療中に消失してゆく経過が観察された.

本邦では128例の報告がみられる. 患者の平均年齢は58.2歳で50歳代から70歳代に好発している. 最近10年間で生死の判明している症例を調べると, 84例中, 死亡例は10例 (11.9%) と抗生剤治療が発達した現代でも死亡率は高い (Table 1). 両群の平均年齢は死亡群の方が10歳ほど高齢である. 発症には糖尿病, 血液疾患, 尿路や外陰部の処置や病変が大きく関連している. 生存例と死亡例の基礎疾患を調べてみると生存例の半数以上 (40例) に糖尿病が見られていたのに対し, 死亡例には骨髄性白血病, 脳腫瘍, 直腸癌など血液疾患を含めた悪性腫瘍を有していた患者 (6例) が多く, 糖尿病は少なかった (3例). 近年各種薬剤の出現により糖尿病のコントロールは比較的容易となったが悪性腫瘍での低栄養状態や化学療法による免疫能低下状態が予後を左右する.

自験例は鼠径部の生検を契機に発症している. 過去10年間の Gangrene のケース84例のうち, 誘因のわかったものが46例で, その内訳は尿道カテーテル留置8例<sup>3)</sup>, 尿路の外傷, 感染13例, 泌尿器科的処置5例<sup>4,5)</sup>, 会陰部の外傷, 感染8例であった. 悪性腫瘍や, 血液疾患のある高齢者に対して泌尿器科的処置や

会陰部, 鼠径部の手術をする場合には本疾患を考慮に入れることが大切である.

## 結 語

悪性リンパ腫に合併した Fournier の壊疽の1例を経験した. 高齢者の外陰部の処置で, 注意を必要とすることと, 病変の把握に CT 検査が有用であることを述べた.

## 文 献

- 1) Spiranak JP, Resnick MI, Hampel N, et al.: Fournier's Gangrene: report of 20 patients. J Urol **131**: 289-291, 1984
- 2) 空本慎慈, 大西由喜, 溝端乃里夫, ほか: Fournier's gangrene の1例. 西日泌尿 **53**: 951-954, 1991
- 3) 安保隆文, 石塚栄一, 岩崎 皓, ほか: 化学療法により著好した陰部電撃性壊疽の1例と本邦91例の統計的観察. 西日泌尿 **56**: 1407-1409, 1994
- 4) 竹山旋美, 本城 充, 大西規夫, ほか: 尿道拡張術後に発症した Fournier 壊疽. 臨泌 **4**: 59-61, 1993
- 5) 仙石 淳, 山下真寿男, 梅津敬一, ほか: 前立腺マッサージが引き金となった (?) Fournier's gangrene の1例, 泌尿紀要 **36**: 1097-1100, 1990

(Received on February 14, 2000)

(Accepted on May 11, 2000)